

〔古今和歌六帖〕六はたおりめ。

雁がねの羽風を寒みはたおりめくだまく聲のきりくとなく

〔虫歌合〕ころろぎ。

中々にあれてもよしやくさのいほいつころろぎときみはたのめず

鈴蟲

〔下學集〕上氣形鈴蟲

〔書言字考節用集〕五氣形松蟲俗字 金鐘蟲 月鈴兒

〔東雅〕虫多促織略○中 毛詩にみえし莎雞、羅願が爾雅翼に、有青褐兩種といふ、其青なるものは、此

にいふ松蟲也、其褐なるものは、此にいふ鈴蟲也、中略爾雅翼にいふ莎雞は丘光庭が兼明書に、其

上有下、正似緯車、故今人呼爲絡緯者と見えて、俗に金鐘兒、月鈴兒な

どいふ類、此にマツムシ、スバムシなどいふ、皆其類にして、翅鳴者也、

〔和漢三才圖會〕五十三化生蟲松蟲 正字未考 末豆無之

按松蟲蟋蟀之類、褐色而長髭、腹黃、在野草及松杉籬、夜振羽鳴聲如言、知呂林古呂林、甚優美也、凡松

蟲鈴蟲晝難得、夜照燈則慕光來捕之、畜于蟲籠、以竹筒盛水投鳴、踏草二三葉、每旦新換水及草、掃糞

其屎如胡麻、大暑以後始鳴、九十月止、略○中

金鐘蟲 月鈴兒 俗云鈴蟲

按此亦蟋蟀之類、眞黑似松蟲、而首小尻大背窄、腹黃白色、夜鳴聲如振鈴、言里里林里林、其優美不

劣於松蟲

〔年山紀聞〕松蟲、鈴むし、

おのく聲によりて名づけたり、色をもていはゞ黒はまつ虫、あめいろなるはすゞむし、賀茂の

神官むしえらびして、禁裏院中に奉る事、ふるくよりしかなり、關東にては、とりちがへて、おぼえ

たり、